

# 福田寺だより

発行

55

神奈川県小田原市飯田岡二五七-27  
 飯田山 恒福 田 土寸 36  
 住職 橋本尚信 伍

## 木造本堂の語るもの

福田寺本堂の完成を間近に控えて

あちらこちらから聞こえてくることは、「屋根の形が何とも言えずいいですね」「神社の方から山崎さんの畑越しに見る本堂は、周囲の景観と良くマッチしてますね」「やさしく優雅ですね」「ところが落ち着きます」「木のぬくもりが感じられていますね」「等々、良い評価がほとんどで、批判はあまり耳にしません。私はこれらの言葉を聞いて、本堂建築の意図するものがある程度達せら

た気がしています。

第一に、本堂は人々の精神的安らぎの場でなければならぬということとです。日本人にとって安らぎのある建築物とは、真に伝統的に受け継がれてきた木造建物だと思います。木のあたたかみと、木組みでなければ出せない屋根の流れと、何よりも大工さんの愛情によって作り出されてくる一つ一つの作品の集合体であるということとです。機能性のみを追求した鉄骨建築を本堂という安らぎ

を求める建物に使用することは無理があることだと思ふのです。(尤も特別の事情がある場合は別ですが)日本人の心には長い間に培われてきた精神構造があり、安らぎの心は必然的に木造建物を求めているのだと思います。

第二に、本堂は伝統的建築物の芸術品であるべきだということです。今や建物といえば、近代建築材料の普及に伴い、建築材のほとんどが安く売らんが為、大手企業が規格品を大量生産し、それをただ打ちつけてゆくとといった程度で出来上がってしまします。このような工程では、匠といわれる職人方の腕を振るう場が全くありません。このような中に職人気質といったものは益々失われてゆく一方であります。

このことは建築に限ったことではありません。私たちの周りでは、様々な分野で伝統文化が崩壊しつつある

のです。

このような状況の中で、伝統を受け継ぐ立派な職人方が活躍できる場を少しでも提供できたということは、たいへん意義あることだとおもいます。

第三に、本堂は地域社会の象徴であるということ。都会には都会の、農村には農村の、そして山村、漁村、新興都市、歴史的都市、それぞれの地域性の上に文化が生まれ、その文化を象徴する一つが、本堂でもあると思うのです。つまり地域社会の人々の文化に対する考え方が本堂というかたちになって現れてくると言っても過言で無いと思うのです。

以上のような観点から本堂建築の意義に照らし合わせてみた時、福田寺の場合正統な評価が出来るのではないかと思うのですが、如何でしょうか。

集

特

## 本堂新築工事進行

—— 完成 近 づ く ——

本堂工事は天井、敷居、位牌壇、廊下の床、水や、戸棚と丁寧に仕上げられています。服部棟梁の真心が作品一つ一つに表れていて、本当に頭の下がる思いでいっぱいです。

同時に、電気、左官、サッシの工事も進行しています。電気は浅倉電気が担当しています。浅倉さんは、お寺の下の浅倉家の二男で、電気業に入るきっかけが先代住職の縁であったことなどから、熱心に研究をして、仕事にあたってくれています。又、左官は大磯の安部川左官が担当しています。安部川さんも残り少ない左官職人の一人で、コツコツとし

っくい壁を仕上げてくれています。仕上がりは、ご覧いただければ充分理解いただけるものと思います。

サッシは東京の加藤建具店が担当していますが、本堂という特殊な建物だけに、特別注文を仕上げてゆく技術を持った、一般店にない職人さんであります。

あらためて、三浦忠社寺建築の職人気質の人々の集まりに感心させられている次第です。

足場が取り外されて、建物の全姿が見れるようになりましたが、服部棟梁の情熱が建物に乗り移っているようで、見事であります。

まんだら

曼茶羅とは何か

私達が普通「曼茶羅<sup>まんだら</sup>」というと、本堂に掲げてあるたくさんのお仏を描いた絵を想像します。たしかに様々な色と形をしたお仏、菩薩、明王などが一面に描かれている絵画を、一般に曼茶羅と言っています。

しかし、この絵に書かれた曼茶羅のものは、行者（人）の瞑想の中で浮かんでくる心像で、現実の形をもったものではありません。

つまり悟りの世界を表現したものといえると思います。元来、悟りの内容を文字とか言葉でもって言い表すことは出来ないという考え方が一般お仏教の立場でした。しかし、弘法大師（空海）の伝えた密教では、悟り（真理）の世界が伝達することが

まったく不可能なものであるならば真理それ自体、われわれ人間にとって無意味な存在になってしまおうという考え方をしたのである。

そしてその方法として、通常の論理による認識作用ではなく、直観智を通じてとらえようとしたのです。

真理は絶えず我々に向かって暗号を送り続けている。その暗号を解くか解かないかは、受ける我々いかによるといふのです。

曼茶羅とは、もともとインドのサンスクリット語のマンダラの音訳で集合とか、区分、円輪、本質的なもの、壇、道場といった意味があります。現在チベット密教で護摩を焚く時、土壇を築いて一回限りで破壊し

てしまいますが、これが壇としての曼茶羅のもともとの意味の形のようなのです。

図像としての曼茶羅は、日本には弘法大師によって初めて中国から請来されましたが、大師は胎藏曼茶羅と金剛界曼茶羅というものを、対にして両部曼茶羅として伝えました。

これが現在、各寺院に受け継がれている曼茶羅の基になっているのです。もっとも、この図絵の曼茶羅にも大曼茶羅というお仏の具体的な姿を絵画化したものや、三昧耶曼茶羅というお仏の持ち物（剣、経文、蓮華など）で表したのものや、法曼茶羅という本尊の種字・真言で表されたものなどいろいろあります。

空海は、この曼茶羅を宇宙の凝縮図として、悟り（真理）の象徴的な表現として伝えました。文字と言葉だけで思想を表現するの

ではなく、曼茶羅の絵そのものか思想である。言葉にならない言葉、声なき声の積極的な表現形式であるというのです。

曼茶羅に描かれた仏、菩薩の色、形、位置、持ち物などがことごとく暗号を発して、我々に絶えず語りかけているのです。

現実世界の中に真実なるものを見出す眼を持った密教の行者（私達一人一人）にとっては、現実世界の森羅万象ことごとくが、無限の価値を持ち、それはそのまま、曼茶羅の世界に外ならないということではないでしょうか。

~~~~~  
お守り・お札の処分

古いお守りやお札など、自分で処分しにくいものは、12月27日までに寺の所定の場所に置いて下さい。お焚きあげします。（燃える物のみ）

### 福田寺厄除け薬師 護摩供養会開催のおしらせ

今日、多様化する社会の中で私達にとって不安な要素は多々有りますが、最も私達の精神、肉体を苦しめるものは病気だと思えます。

真言密教には、この病苦から逃れる手段として、薬師如来を奉り一切の苦難の原因を取り除く護摩供養が千数百年の間、連綿と受け継がれて参りました。

拙僧も、真言密教の僧として法灯を受けて21年、福田寺住職を拝命して15年、この間毎月8日（薬師如来の縁日）に、自行（自分一人）にて本尊薬師の護摩を焚いて来ました。

その間、病魔退散、厄除け、身体健全等の護摩をたいて欲しいとの要望者には、その都度お一人お一人に御祈禱してきましたが、近年その依頼が多く、自受用（僧自身の祈禱）だけでなく、他受用（広く一般の人々

への祈禱）の護摩の必要性を強く感じる次第となりました。

就きましては、下記の要領で薬師護摩供養会を開催致しますので、御希望の方はお申し込み下さい。

尚、古来よりその霊験があらたかと言われている、福田寺の聖天さまのおまつりを希望される声もきかれますが、こちらは本堂の落慶後、準備を整えてから開催したいと考えておりますので、その時は御協力をお願い致します。

#### 記

期日・・・一月八日、午後一時より

祈禱内容・・・厄難消除（厄除け）

身体健全、病魔退散

祈禱料・・・三千元

申し込み方法・・・一月七日まで

電話可

当日欠席者には後日お札を渡します。